

長野大学学生相談室の実態報告 (1985~1990年度)

A Report on the Actual Condition of Student Counseling Room of Nagano University (1985~1990)

松本文男

Fumio Matsumoto

学生相談室の設置

第二次大戦後、急激な物質社会の膨脹発達、社会機構の複雑重層化、社会変動の激しさ、価値観の多様化等により、学生生活にも極端な混乱を生じてきた。

これら学生問題の一部にふれても、修学・履習・学習方法・学業不振・学習意欲の問題・転学・退学・留年関係・就職・適性・自己の性格・友人・異性関係・Student Apathy・サークル活動・宿舍・対人関係のトラブル・家庭崩壊・経済問題・精神障害・心身症・自殺志向・交通事故等々百人百態の現状である。

このような時、学生相談室に於けるカウンセリングの推進は必須の条件となってきた。

全国の大学においてその規模の大小を問わず昭和二十年代後期より学生相談室が設置され始め今や四年生大学では全大学の $\frac{5}{6}$ に、短期大学に於ても $\frac{2}{3}$ 、以上に学生相談室の出現をみるに至ったのは当然といえよう。

始動 確立期

本学においては昭和60年度より学生相談室が開設された。

即ち、平成2年度には6年目を迎えた。この6ケ年は2つの段階に分けることができる。

前半は昭和60年度~62年度迄の3ケ年間であり順調な出発から体制確立迄の期間といえよう。

昭和60年度は当初2名の相談員で週2日実施したが、中途より更に2名の補充がおこなわれ4名で週4日の相談室は開室された。開室に先立って学生の悩み調査を実施し、前年から日本学生相談学会に加盟しその研究会にも出席している。

昭和61年度は相談担当教員は6名に拡充され週

5日の相談日が設定された。なお学生相談室主催による全教職員の意見交換会がもたれるなど存在感が強まっていった。相談室便りを発行し学生生活への助言が丁寧に行なわれている。この年から相談室会議も年6回開催され事例研究も行なわれ相談員相互の研究活動も進められるようになっていく。

昭和62年度は前年に引続き6名の相談員で週5日の相談日が設定された。

特にこの年度には相談室規定を数回の綿密な相談室会議を径て作製し、法規委員会を通して教授会議決を得、後理事会にも承認された。

これらは学生相談室の活動が全学的に決定的位置づけを得たことであり将来への展望が明確にされたものといえる。この規定に於て、学生相談教員は学長が委嘱し、相談室長も学長委嘱を必要とするなど、大学運営上重要な位置付けがなされた。

定着 活動期

昭和63年度~平成2年度の3ケ年は学生相談室が前面に出る姿勢はとられないながら大学機能の重要な役割を果してきたといえる。

年度当初相談室長が学長から委嘱され、相談員7名が同じく委嘱を受けて月曜から土曜まで週6日の相談日を設定し、運営された。相談学生も急増し相談内容も学生生活の全分野にわたって行なわれている。

相談室の大要は教授会毎に相談室長が報告し、相談室提案の議題・特に単位履習・学習指導方法・本学学生に対するアプローチの方途等につき熱心に論議されるまでになった。

平成元年度及び2年度は引続き7名による充実緻密な相談活動が進められているが、産業情報学

科が昭和63年度より出発したためもあり相談者数は増加の一途を辿っている。特に夏期休業中や年度末休業中も相談教員は家庭迄連絡を受けて相談室活動は旬日の休みも無い状況だった。また平常日も夜間まで相談を受けている。更にこの年度からは相談室の重複などを避けるため各研究室での相談そして相談教員の家庭での面接も見受けられた。

深刻で多様な相談に対処する為相談教員のケース・カンファレンスも月毎に定例で実施されている。

以上概要を述べてきたが次に年度別相談教員及び年度別相談学生数等を列記する。

相談教員

昭和60年度

- 大藪 泰 (発達心理学・臨床心理学)
- 佐々木 涇 (フランス語)
- 志 関 義 昭 (英語)
- 南 雲 直 二 (精薄者福祉論・障害児教育)

昭和61年度

- 大藪 泰 (発達心理学・臨床心理学)
- 小川 勝一 (社会科教育法・教育方法研究)
- 桜田百合子 (児童福祉論・社会保障概論)
- 佐々木 涇 (フランス語)
- 松本文 男 (カウンセリング・心理学・精神衛生)
- 安井 幸次 (社会学概論・地域社会論)

昭和62年度 昭和61年度に同じ

昭和63年度

- 室長 松本文 男
(カウンセリング・心理学・精神衛生)
- 大藪 泰 (発達心理学・臨床心理学)
- 小川 勝一 (社会科教育法・道徳教育研究・青年論)
- 桜田百合子 (社会保障論・児童福祉論)
- 佐々木 涇 (フランス語・文学)
- 高橋 満 (家族社会学・社会病理学)
- 安井 幸次 (社会学概論・地域社会論)

平成元年度 昭和63年度に同じ

平成2年度

- 室長 松本文 男
(カウンセリング・心理学・精神衛生)
- 大藪 泰 (発達心理学・臨床心理学)
- 小川 勝一 (社会科教育法・道徳教育研究・青年論)
- 桜田百合子 (社会保障論・児童福祉論)
- 佐々木 涇 (フランス語・文学)
- 松原 邦彦 (プログラミング・シミュレーション)
- 安井 幸次 (社会学概論・地域社会論)

年度別 実来談者数
延来談者数
主訴 別数

昭和60年度

(表1)

学 科	産 業 社 会 学 科										社 会 福 祉 学 科										総 計		
	1 年		2 年		3 年		4 年		5年以上		計	1 年		2 年		3 年		4 年		5年以上		計	
性 別	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		男
実来談者数	3	0	1	0	3	1	4	0	0	0	12	3	1	4	2	5	2	4	4	1	0	26	38
延来談者数	5	0	3	0	9	4	6	0	0	0	27	8	9	7	7	17	12	5	19	6	0	90	117
主 訴	学 業	2				1		2			5	2		2		4		2	1	1		12	17
	課外活動			1		1					2			1		1						2	4
	進 路	1				1		2			4	1		1	1	2	1	1	1			9	13
	性 格	1					1				2		1		1							2	4
	対人関係			1		2	1				4	1	1	2		2	1	1	2			10	14
	健 康										0		1						1			2	2
	精神衛生						1	1			2	1			1			2	2	1		7	9
環 境	1									1					1			1			2	3	
主 訴 計	5	0	2	0	5	3	5	0	0	0	20	5	3	6	3	8	4	6	8	3	0	44	64

昭和61年度

(表2)

学 科		産 業 社 会 学 科										社 会 福 祉 学 科										総					
学 年		1 年		2 年		3 年		4 年		5年以上		計		1 年		2 年		3 年		4 年		5年以上		計		計	
性 別		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計	
実来談者数		5	0	2	0	2	0	5	0	0	0	14	3	0	5	1	2	3	4	6	3	0			41		
延来談者数		7	0	6	0	6	0	7	0	0	0	26	11	0	25	18	4	14	13	28	14	0	127	153			
主 訴	学 業	4		1		1		2				8	2		1				1			3		7	15		
	課外活動					1		1				2												0	2		
	進 路	2		1				3				6	1		2		1	1	2	3	2		12	18			
	性 格							2				2	1		1		1	2	1	1	1		8	10			
	対人関係					2		1				3	3		2	1		2	2	3			13	16			
	健 康											0						1					1	1			
	精神衛生			1				1				2	1		1	1	1	1	2	3	2		12	14			
環 境	1						1				2						1					1	3				
主 訴 計		7	0	3	0	4	0	11	0	0	0	25	8	0	7	2	4	7	8	10	8	0	54	79			

昭和62年度

(表3)

学 科		産 業 社 会 学 科										社 会 福 祉 学 科										総					
学 年		1 年		2 年		3 年		4 年		5年以上		計		1 年		2 年		3 年		4 年		5年以上		計		計	
性 別		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計	
実来談者数		8	0	11	1	3	2	16	2	1	0	44	12	9	21	2	18	2	19	5	4	0	92	136			
延来談者数		9	0	13	8	12	3	19	5	3	0	72	20	13	25	4	27	5	29	12	11	0	175	247			
主 訴	学 業	3		2		1		3		1		10	9	6	10		4		3	1	2		35	45			
	課外活動	2		2			2					6	1		1		1						3	9			
	進 路	1		3		1		9	1			15	2		7		12	1	17	3	1		43	58			
	性 格	2			1		1					4				1	1	1			1		4	8			
	対人関係	1		4	1	1		3	1			11	4	2	2	1	2		2	3	1		17	28			
	健 康							1		1		2				1		1	1				3	5			
	精神衛生	1			1			2	1			5	3	2	7	1	3		2	1	1		20	25			
環 境							1				1						1			1		2	3				
主 訴 計		10	0	11	3	3	3	11	3	2	0	54	19	10	27	4	23	4	25	8	7	0	127	181			

昭和63年度

(表4)

学 科		産 業 社 会 学 科										産 業 情 報 学 科		社 会 福 祉 学 科										総							
学 年		1 年		2 年		3 年		4 年		5年以上		計		1 年		計		1 年		2 年		3 年		4 年		5年以上		計		計	
性 別		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計			
実来談者数		11	4	10	3	8	2	17	5	2	0	62	28	2	30	16	9	14	6	20	7	23	8	5	1	109	201				
延来談者数		25	9	18	10	26	7	34	17	10	0	156	58	11	69	28	17	25	11	54	10	42	16	14	3	220	445				
主 訴	学 業	4	1	2		3		5		2		17	16		16	5	2	6	1	11	3	18	4	4		54	87				
	課外活動			1			2					3	1		1	1		3	1							5	9				
	進 路	5		2	1	3	1	5	1			18	4		4	5	2	4		6	2	5	3	1		28	50				
	性 格		1	3	1		1					6	1		1	1	1		1		2		1			6	13				
	対人関係	2	2	1	1	2		6	3			17	4	1	5	4	4	2	3	5	2	6	4		1	31	53				
	健 康						1		1			2	1		1			1				1	1			3	6				
	精神衛生	3	1	1	1	2		2	2			12	4	1	5	2	1	3	1	4		3	3	2		19	36				
環 境	1								1		2								1		1				2	3					
主 訴 計		15	5	10	4	10	4	19	7	3	0	77	31	2	33	18	10	19	7	27	9	33	16	8	1	148	258				

平成元年度

(表5)

学 科	産 業 社 会 学 科										産 業 情 報 学 科					社 会 福 祉 学 科										總 計				
	1 年		2 年		3 年		4 年		5年以上		計	1 年		2 年		計	1 年		2 年		3 年		4 年		5年以上		計			
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		男	女	男	女		男	女	男	女	男	女	男	女	男			女	男	女
実来談者数	12	3	9	3	11	1	15	6	2	0	62	27	3	20	7	57	27	8	19	5	36	7	29	12	6	3	152	271		
延来談者数	23	7	13	4	20	7	32	16	6	0	128	58	19	38	13	128	63	15	31	24	61	15	69	22	33	4	337	593		
主 訴	学 業	4		4		3		7		2		20	9		7	2	18	9	2	6	1	17	3	14	3	6	1	62	100	
	課外活動			1		3						4	1		1	1	3	1	1	3		3						8	15	
	進 路	5		3		4		1	2	1		16	8		5		13	7	2	3	2	11	1	8	3	1		38	67	
	性 格					1		2	1			4	1		2	1	4	1		2	2	1	1	1				8	16	
	対人関係	1	2	1	1	2	1	5	1		14	14	4	1	3	2	10	4	3	3	1	3	2	5	5	1	1		27	51
	健 康	1		1				1	1			4		1	1		2		2		1	1	1	1		1		7	13	
	精神衛生	1	1	2	1			1	1	2		9	3	1	4	2	10	3	1	2		2	2	3	2	1	1		17	36
環 境				1							1						1				1		1					3	4	
主 訴 計	12	3	12	3	13	2	17	7	3	0	72	26	3	23	8	60	26	11	19	7	39	10	32	14	9	3	170	302		

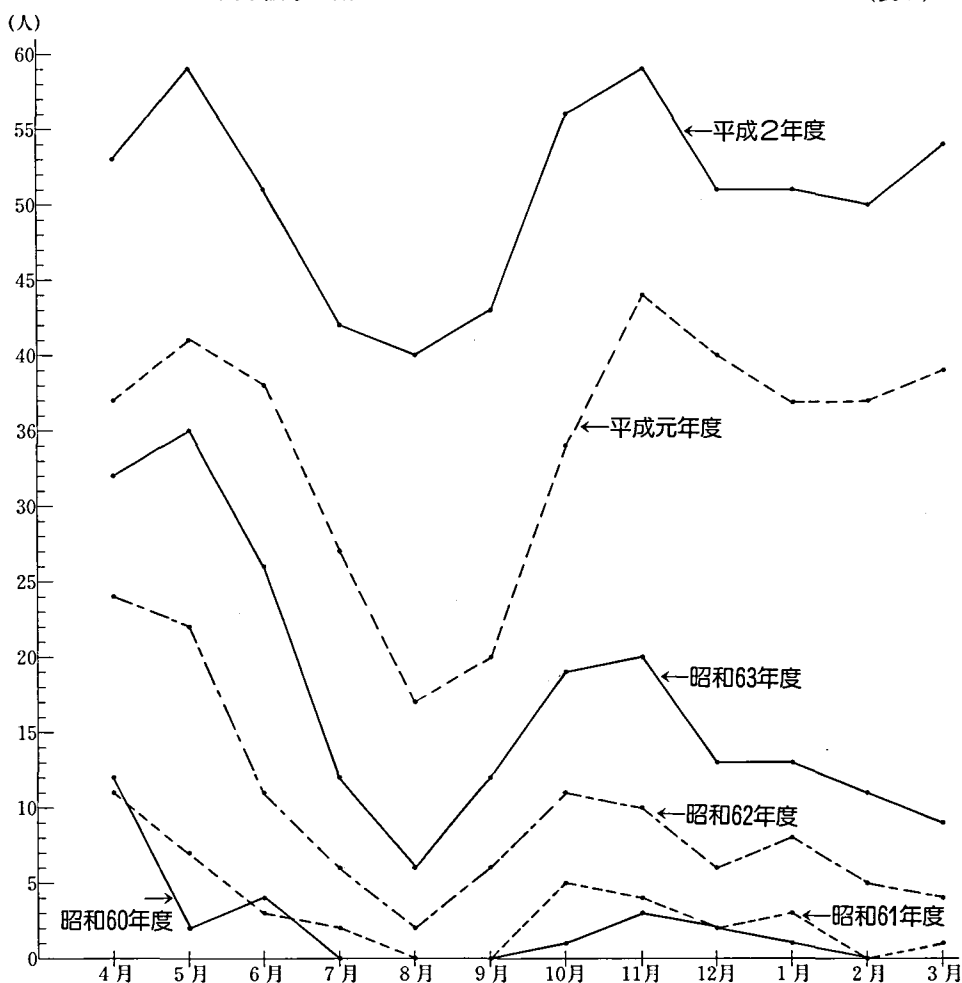
平成2年度

(表6)

学 科	産 業 社 会 学 科										産 業 情 報 学 科					社 会 福 祉 学 科										總 計					
	1 年		2 年		3 年		4 年		5年以上		計	1 年		2 年		計	1 年		2 年		3 年		4 年		5年以上		計				
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		男	女	男	女		男	女	男	女	男	女	男	女	男			女	男	女	
実来談者数	33	10	19	7	21	9	20	8	6	5	138	51	6	42	7	33	7	146	45	27	34	26	41	32	40	40	35	12	332	616	
延来談者数	52	17	34	11	46	21	49	19	15	7	271	82	1	87	14	67	12	273	80	44	63	66	79	58	75	83	67	21	636	1180	
主 訴	学 業	10	1	4		9	2	5	2	3	1	37	21		17	1	14		53	16	8	10	12	11	15	20	17	26	7	142	232
	課外活動	2	3	3	1	2	2	1				14	6	2	3		1		12	5		4	3	6	2	1			21	47	
	進 路	9	1	4	1	7	3	6	1			32	5		2	1	3		11	10	6	9	5	8		2	7	2	1	50	93
	性 格	1	3	5		2		3	2	1	1	18	7	1	8	2	3	2	23	7		6	5	4	3		2	4	1	32	73
	対人関係	6	2	3	2	4	1	7	2		1	28	10	3	11	3	10	3	40	11	1	3	10	6	2	9	5	1		48	116
	健 康	3	1	2	1	2	1	6	3	2		21	6	1	9		8	1	25	9	4	8	5	13	11	7	9	6	2	74	129
	精神衛生	8	1	4	3	5	4	7	2	3	2	39	8	1	10	1	7	1	28	8	15	7	4	14	9	11	14	8	2	92	159
環 境	2		1		3		1				7	3		4		2		9	3	3		1		1	2		1		11	27	
主 訴 計	41	12	26	8	34	13	36	12	9	5	196	66	8	64	8	48	7	201	69	37	47	45	62	43	52	54	48	13	470	867	

年度別・月別の初回来談学生数

(表7)



考 察

相談室利用学生数

年毎に相談室を訪れる学生数の増加傾向は、日本学生相談学会の調査によっても全大学に見られるが、本学に於いては特に顕著である。

理由としてあげられるものは相談室の位置が他の学生から見にくい点、相談教員が各研究室を利用することになったこと及び相談教員の自宅が殆んど大学の近郊にあること等が考えられる。

次には相談教員のほとんどが休業中も気軽に相談に応じたことも大きい。開設当所の1、2年、夏季及び年度末休業など0に近かった相談者が、年々休業中も通常時に対する減少率は僅かになった。これら長期休暇中の相談室開室は他の国公立・私立大学でもその66パーセントが平常通りで

あり短縮が20パーセントとなっている。従って86パーセントが何らかの形で相談を実施している。本学の場合もそのようにならざるを得ない状況である。

相談内容

日本学生相談学会の平成元年度調査によると、相談内容に年々変化がみられている。即ち学業関係・進路関係・対人関係が十年前には突出していた。それが現在は精神衛生関係が急増しつつある。本学に於ても平成2年度の主訴を見ると、学業232件、つづいて精神衛生159件・健康120件・対人関係116件そして進路関係93件となっており全国的傾向と大きく異なることはないと思われる。今後この傾向が一層増加することが相談担当者として実感している。従って面接担当教員は精神衛生上

の研修が望まれると思われる。時によって、精神科医との協力体制を必要とした例もみられた。

保護者へのかかわり

学生本人からというよりその保護者から当該学生の面接治療を求められ、呼び出し相談の形式をとる場合もこの1、2年特に増加している。相談教員は学生の下宿・アパートを訪ねカウンセリングを実施することも急増している。時には遠隔地にある学生の自宅迄時間と旅費を費やしてその責務を果さなければならないこともあった。

相談活動の複雑多様化はこれまた一層急テンポで進んでいると考えられる。

備品

心理テストを始めとし相談室備品も、欠くことのできないものが増加している。本学において、相談教員は私物を利用して当っている場合が多い。知能テスト数種・職業興味検査・職業適性検査・MMP I・MPI・ロールシャッハ・TAT・ゾンディ・バウム・クレペリン精神作業検査・環境検査・脳波検査・音楽療法セット・テープレコーダ・VTR・コンピュータ・学生貸出用図書等々である。

附 学生から相談教員への便り（現在全快で本人了解を得たもの）

A君より

転学・退学と何度も先生のお宅におじゃましご迷惑をおかけいたしました。でも、いよいよ決心する時が来たようです。退学という決心です。ごやっかいをおかけしたことに気をとがめてはおりますが、ぼくの心は、これでむしろせいせいした感じです。ふっきれた思いとでもいうか、学校とえんがなくなるといふか、あるいは親の期待という重荷から解放されたといふか、そんなものがごっちゃになって今はむしろすっきりした気分なのです。郷里の両親は、そして弟や妹は残念がったり、悲しかったり、せつながったりするかと思いますが、こう決めてこんなにすっきりしたばかりですから、この道を歩むのがベストだと思います。すぐに郷里には帰らずバイトなどしながら今後の道をじっくり考えようと思います。唯、今は、この何も重荷のない時間をすごしていることでいい

気分なのです。先のことは、ゆっくり考える方が今のいい気持ちをこわさないためにも、大切なような気がします。またおじゃまするかもしれませんが、その切はよろしくお願いします。なお退学のことは家庭へはまだ先生から知られせるのは止めていただきたいと思います。もともとぼくは、中学以後、学校にはあわなかった人間のような気がします。ただ苦しめられるために学校という牢の中に入っていたような気がします。

B君より

今日（月）相談室に先生がみえませんでしたので便りを書きます。

最近体が重く動くのが大変で一日中ぐったりしています。

これではいけない、これでは駄目になると自分をしかり、腕をかんで血を出してみたり、こんろで指（足）をこがしてやけどしてみても、その時苦しいだけです。終れば痛みはありますが何も変わりませせん。

僕は駄目人間なのです

こんな僕を先生なら何とかできますか。多分だめだと思いますが、わらをもつかむ思いで手紙をします。

電話を下さい。ご自宅に伺います。大学がいやで止めたいので、むしろ先生のご自宅がいいのです。ご厄介な僕を、どうか打ちのめすなり、退学しろと命令して下さい。自分では自分がどうにもならないのです。

先生がいなければ半年前に退学したと思います。半年前に一度相談室で雑談したので今日まで在学のかっこうをしていただけですから。

ではよろしく。

C君より

昨夜半ようやく決心がついたのでご連絡します。

この5ヶ月迷いに迷いました。苦しみました。行き詰まりました。死ぬことも幾度か考えました。他大学再受験の準備のみわずかながらしてきました。

6月はじめ、長野大学退学、あこがれの〇〇大

受験と心に定め、それでも先生に一度は相談して父親説得のための方法をつかみたく研究室を訪ねました。

以後、相談室、研究室、ご自宅と覚えておいででしょうが十六回おじゃましました。

日は過ぎ、あせり、迷い、困惑し、悩み、苦しみ、やけになり、酒を飲み、死を思いの日々で講義どころではありませんでした。

長大をすべり止めにしたのは、これが県内であり、父が“尊敬できる先生がいるぞ”という言葉からでした。

しかし、実際は、一年生でも受講できる心理学に出ても特別何も感じませんでした。

先生に会わなくてはならなくなったのは、退学を決意し、混乱の極に達し、不安感や苦しみの世界に落ち入って、あの研究室でお会いしてからです。

世の中でこんな暖かい人に会ったことはない。こんな大きな人間がいるだろうかと思ったのです。だがその為に再び迷ったのです。困ったのです。苦しんだのです。

そして昨夜決心がつかしました。長野大学を続けるということです。

私の場合、学問というより人が大切です。理論より心が僕を生かしてくれます。

先生のお宅で外国語の原書の山を見ても何も思いませんでした。こんなものは僕だってやがて乗り越え得る。唯、この人のような大きい人間にな

れるかどうか。それは夢ですが、その夢を追います。迷える小羊というより、主なき小犬である打ちひしがれたみじめな僕と共に悩み、共に苦しみ、時折そっと涙をぬぐう、そばに居ればやがて心が楽になり、安定し、氷がとけるように血が動き出して呼吸ができ、命が流れ出す。そんな先生のような人間を夢として生き度いのです。

主なき小犬は、その主を見出しました。

もう上田を離れません。

結 び

個々の学生の心理深層に入ると、千人千様といえる現在である。その行動はたとえ同一でも苦しみ・悩み・寂しさ・不安・恐怖・憎しみ・夢・憧れ・希望・喜び・エネルギー等は決して一様ではない。全く平静に見えてもその夜から退学を思い、死を考えることが当然のように起っている。換言すれば在学するすべての学生に例外なく面接相談等援助の必要な時が来たときえいい得るような昨今である。

学生相談室の利用は理想的にはされない方がいいのかもしれない。しかし、相談に関与していればいるほどその重要性の大きさを切実に感じてきた。教職員の総べてがカウンセリングマインドを養わなければならない時のような思いもする。

(まつもと ふみお 教授)

(1991. 5. 13受理)